

“漢字遣い”の問題点

武 部 良 明

1. 考察の対象

日本語を文字で書き表す場合、仮名をどのように用いるかということを決めたのが、“仮名遣い”と呼ばれる準則である。内閣告示「現代かなづかい」も、そのような立場で現代国語の口語文を仮名で書き表す場合の準則を示したものである。それならば、漢字をどのように用いるかということについても、同じような考え方が適用できないかということになる。これが、この小論で“漢字遣い”と名づけた準則の内容である。

この場合、現代日本語の口語文は、漢字仮名交じり文が一般である。したがって、ここでいう“漢字遣い”も、そのような漢字仮名交じり文において漢字をどのように用いるかの準則を示すものになる。そうして、その場合の結論を先に述べれば、“漢字は意味を構成する単位として用いる”ということである。この点で“漢字遣い”は、“音節を単位として用いる仮名遣い”の場合と、全く異なる行き方をしているわけである。そうして、この実態を無視して漢字を学習しようとすれば、漢字はいたずらに記憶の負担を増すだけのものになってしまう。漢字を日本語学習の障害と考えるのも、このような立場からの見方である。しかし、逆にこの実態が正しく掌握できれば、漢字は日本語そのものの学習における記憶の負担を、かえって軽減する役割も果たすのである。“日本語は、漢字を除外して学習することが全く不可能だ”と言っても差し支えないくらいである。

以下、そのような立場から、“漢字遣い”の準則を明らかにしてみたいと思う。それは、当然のことながら、二つの面から成り立つことになる。

その一つは、どういう部分を漢字で書くかということであり、もう一つは、その部分をどういう漢字で書くかということである。

2. 漢字音読の場合

まず、どういう部分を漢字で書くかという準則について、分かりやすいところから取り上げることにする。その一つは、“漢字の音読に由来する部分は漢字で書く”ということである。

一般に、その漢字の中国語としての発音が日本に伝わって多少崩れたものを、その漢字の字音という。「車」という漢字を〔シャ〕と読み、「牛」という漢字を〔ギウ〕と読むのが字音である。そうして、漢字をそういう字音で読む場合が音読であり、そういう音読に由来する部分は、漢字で書くのである。〔デンシャニノリマス〕について言えば〔デンシャ〕の部分が音読に由来し、〔ギウニクヲタバマス〕は〔ギウニク〕の部分が音読に由来する。そうして、日本語を文字で書き表すことに習熟すると、この場合の〔デンシャ〕〔ギウニク〕について、それぞれ漢字2字を用いるということまで直感するに至るものである。

それならば、なぜ〔デンシャ〕〔ギウニク〕について、そのように直感できるかということであるが、その根拠は、音の並び方がいかにも漢字2字の音読らしいということである。そうして、そのことは、漢字を音読する場合に現れる次のような発音上の特色に基づくと考えられるのである。

今、分かりやすいように内閣告示「当用漢字音訓表」の範囲内で考えることにする。その場合、そこに掲げられた漢字の字音について、その発音上の特色という点から分類すると次のようになる。まず、それらはいずれも1音節か2音節から成り立っているということである。次に、その2音節から成り立っているものの2音節めは、「い・う・き・く・ち・つ・ん」の7種類だということである。

① 1音節から成り立つもの

直音・清音(火か 左き 池ち) 同・濁音(五こ 馬ば 事じ)

拗音・清音(車しゃ 手しゅ 書しょ) 同・濁音(邪じゃ 授じゅ 女じょ)

② 2音節から成り立つもの

○い(会かい 映えい 外がい) ○う(光こう 小しょう 牛ぎゅう)

○き(式しき 域いき 責せき) ○く(育いく 学がく 職しょく)

○ち(七しち 日にち 罰ばち) ○つ(発はつ 仏ぶつ 出しゅつ)

○ん(安あん 銀ぎん 純じゅん)

実は、漢字の字音に見られるこのような発音上の特色が、[デンシヤ][ギ
ュウニク]という音の並びについて、これを漢字2字の音読に由来する語と
直感させるのである。別の例で言えば、[ダイガク]は漢字2字の音読、[ガ
イコクゴ]は漢字3字の音読と直感できるのである。¹⁾

ただし、以上はそれぞれの漢字の持つ基本的な字音について見たのであ
るが、実際にはこれ以外の形も現れている。それは、以上の基本字音の一
部が前後の関係から別の音に変化することも起こるからである。それら
は、次のような場合である。

① 促音になるもの(促音便)

○き→(石器せつき 赤化せつか) ○く→(学校がっこう 特許とっきょ)

○ち→(一回いっかい 日光にっこう) ○つ→(雑誌ざっし 設計せっけい)

○う→(合併がっぺい 納得なっとく)

② 濁音・半濁音になるもの(連濁)

濁音化(安産あんざん 方角ほうかく) 半濁音化(出発しゅっぱつ 雑費ざっぴ)

③ ナ・マ行音になるもの(連声)

ナ行音化(天皇てんのう 因縁いんねん) マ行音化(三位さんみ)

1) 音読漢字の音の配列がこうになっていることを、速記の立場で速記方式の構成に利用したのが、大正3年に発表の中根式速記法(中根正親「中根式速記法講解」大正5年)である。ただし、実際には、例えば「い」について、すべての音節に「い」が付くわけではない。「い」が付くのはア列・ウ列・エ列の音節に限られていて、イ列・オ列の音節には付かない。このような字音の分布を速記方式の構成に利用したのが、安田勝蔵「日本速記法上に於ける漢字音と其の略字法則の研究」(昭和12年)である。

ここに基本字音にない形として「〇っ」という促音の形が現れている。したがって、漢字の音読で2音節となるものの2音節めについては1種類増え、「い・う・き・く・ち・つ・っ・ん」の8種類と考えるのが実際的である。つまり、漢字の音読に由来する部分には、1音節置きに〔イ・ウ・キ・ク・チ・ツ・ッ・ン〕のいずれかが現れるのである。そうして、漢字仮名交じり文においては、このような音の並び方を区切りとし、それぞれに対応する形で音読漢字を1字ずつ用いるわけである。²⁾

このことは、仮名が一つの音節に対応するのと比べ、一段と複雑である。しかし、このような音読漢字1字分に対応する1音節または2音節が、実は日本語における意味の単位となっているのである。そうして、“漢字遣い”については、“漢字をこのような意味の単位に対応させて用いる”というのが、その準則の一つになるのである。

3. 同音漢字の書き分け

これだけの部分が音読の漢字一字に対応するということが分かった場合、次の問題は、それがどんな漢字に対応するかということになる。その場合、例えば、五十音順当用漢字音訓表のような一覧表を用い、該当する字音にどのような漢字があるか調べるのも一つの方法である。該当する字音の漢字が見付かったとき、その漢字が対応するに違いないからである。

例えば、〔ギェウニク〕という語の場合であるが、字音の構成から考えて〔ギェウ〕の部分を表す音読漢字と、〔ニク〕の部分を表す音読漢字から成り立つことが分かる。そうして、一覧表で「ぎゅう」という字音を持つ漢字を探すと「牛」があり、「にく」には「肉」がある。したがって、〔ギェウニク〕は「牛肉」と書けばよいのである。五十音順当用漢字音訓表を見ると、

2) この場合には、1音節だけのものについてゼロの音節が付いていると考えるほうがよいかもしれない。そうして、漢字を音読した場合に見られるこのような2音節単位が一種のリズムを整えることになり、それが漢字音読語に力強さを与えている。漢字音読語が好まれるのも、一つには字音の持つこのようなリズムによるのである。

このように該当する漢字が1種類のものに、次のような場合がある。

圧 域 育 牛 空 骨 座 邪 出 寸 達 突 内 肉 熱 別
密 陸 略

これらの場合には、いずれも同じような手段で該当する漢字を探し出すことが可能である。

しかし、実際問題として、目ざす字音に当たる漢字が1種類の場合は、当用漢字音訓表だけに限っても、50ほどに過ぎないのである。他の大部分の字音には、次のように、同じ字音の漢字が2種類またはそれ以上見出せるのである。

わ...和・話 きょく...曲・局・極 がく...学・岳・楽・額
もん...文・門・紋・問・聞

こうなると、単純に字音を頼りに該当する漢字を探し出すことができなくなる。それにどうしても別の手順を経なければならないのである。そうして、この場合に考えられる手順の一つが、語を単位として探すということである。

例えば、[ガクモン]という語の場合について考えてみることにする。そうすると、「がく」という字音を持つ漢字が4種類、「もん」のほうも5種類あることになる。しかし、それらの組み合わせで、「がくもん」と読む音読漢字語が20語あるというわけではない。「がくもん」という字音の組み合わせで普通の辞書に載っている語は、「学問」だけである。つまり、音読漢字の場合には、個々の字音に当たる漢字を探すのではなく、その組み合わせに当たる語を単位として探す方法も考えられるのである。そうして、「ぎゅうにく」の場合も、このようにして探すことにより、「牛肉」を見出すことが可能である。辞書に載っているのは、この場合も「牛肉」だけだからである。

しかし、この方法で「でんしゃ」というのを探すとなると、「電車・殿舎・伝写」があり、どの「でんしゃ」か分からなくなってしまう。したがって、この三つの「でんしゃ」から該当する「でんしゃ」を選ぶとなると、

そこに第3の手順が必要となる。こういう点では、五十音順当用漢字音訓表に「こう」という字音を持つ漢字が62字、「しょう」が63字掲げられていることも問題である。「こう」と「しょう」の組み合わせから成る漢字音読語に、次のようなものが見られるからである。

こうしょう...交渉 考証 厚相 校章 口承 工商 公称 公証
公傷 行賞 高承 高唱 鉞床...

しょうこう...商工 商港 焼香 将校 昇降 小康 小稿 消光...
こうなると、「学問」のように、組み合わせた形から選ぶという方法も効果
がなくなってしまう。そうして、こういうときに役に立つのが、その語の
意味を併せ考えるということである。

例えば、「でんしゃ」の場合であるが、「電車」というのは「電気によっ
て動く車」である。それに対し、「殿舎」というのは「身分の高い人が住む
家」であり、「伝写」というのは「書物を伝えるために書き写すこと」であ
る。したがって、[デンシャニノリマス]というときの[デンシャ]がどの
「でんしゃ」かということを考えれば、それが「殿舎」「伝写」でなく「電
車」だということが明らかになる。そうして、このような[デンシャ]の意
味は、「電」という漢字が「でんき」という意味を表し、「車」という漢字
が「くるま」という意味を表すことに基づいている。同じことは、「学問
(まなび・とうこと)」や「牛肉(うしの・にく)」についても当てはまるの
である。

つまり、音読の漢字で書き表される語の場合、それぞれの字音を持つ漢
字の組み合わせだけを考えるのは、実情に合わないのである。その語を構
成する各漢字がその語の意味を担っている以上、特定の字音だけでなく、
特定の意味を持つ漢字の組み合わせとなっていることを見逃してはならな
いのである。

4. 音読漢字の組み合わせ

音読の漢字で組み立てられた語に同音語が多いということは、よく知ら

れていることである。しかし、それらを書き表す漢字まで同じだというわけではないのである。発音が同じでも、それを書き表す漢字が異なれば、原則として別の意味の語と考えてよいのである。「こうしょう」という語が幾つあろうと、それを書き表す漢字が異なれば、それぞれの語の意味が異なるからである。そのため、極端な場合には、「いい天気」を表す語が[コウテン(好天)]で、「悪い天気」を表す語も同じく[コウテン(荒天)]だということが起こる。「水を入れる」ことが[ハイスイ(配水)]でありながら、「水を出す」ことも同じく[ハイスイ(排水)]だということになる。これが日本語における同音語の実情なのである。

しかし、こういう場合、[コウテン]という語に「いい天気」の意味と「悪い天気」の意味があると考えることは、全く無益である。[コウテン]にはそのほかに「高天」「広天」「紅天」があり、「公転」「好転」「後転」もあり、それらをすべて覚えることなど不可能である。実際には、それぞれの語が新出したときに、例えば[コウテンニメグマレル]と出たときに、「いい天気」の意味の[コウテン]を覚えれば十分である。ただし、そのときに[コウテン]という発音と「いい天気」という意味とを直接に結び付けるのでは、これも記憶の負担に耐えられるものではない。そのときには「好天」という漢字と「いい天気」という意味とを結び付けることが必要であり、さらにいえば、「好」と「いい」、「天」と「てんき」を結び付けることが必要なのである。

この場合、個々の漢字の担う意味と語全体の意味との関係については、次のように考えることができる。

① 上の漢字の意味が下の漢字の意味に係っていく。

月末つきの・すえ	美人うつくしい・ひと	休日やすむ・ひ
最高もっとも・たかい	確定たしかに・さだめる	快走ころよく・はしる
雷鳴かみなりが・なる	前進まえに・すすむ	射殺うって・ころす
平然たいらかな・ありさま		

② 下の漢字の意味が上の漢字の意味に係っていく。

開店みせを・ひらく	乗車くるまに・のる	有名なが・ある
多言ことばが・おおい	不動うごか・ない	被疑うたがわ・れる

③ 同じ意味の漢字が続く。

根本ねと・もと	貧乏まずしく・とぼしい	申告もうし・つげる
再三ふたび・みたび	黙々だまって・だまって	少々すこし・すこし

④ 反対の意味の漢字が続く。

昼夜ひると・よる	売買うったり・かったり	晴雨はれか・あめか
高低たかいか・ひくいか	安否やすらかか・そうでないか	

こうして“個々の漢字の意味と全体の意味とを関連させる”ことが、この種の漢字音読語の学習に当たって絶対に必要なものであり、これも“漢字遣い”の準則の一つになるのである。

そこで今、この立場から「好天」を見ると、「美人」と同じ構成で「いい・てんき」になっていることが分かる。これに対して「荒天」のほうは「休日」と同じ構成で、「あれる・てんき」なのである。そうして、このように記憶すれば、同じ[コウテン]が「いい天気」と「悪い天気」を表していても、一向に気にならないのである。また、「いい天気」の[コウテン]を教わったとき、それが「悪い天気」の意味も表すということを全く気に掛ける必要はない。「いい天気」の場合には「好」「天」という二つの漢字と「いい」「てんき」という意味とを関連させればそれで十分なのである。もしも、このときに、他の語と関連させて学習するほうが効果的だと考えても、それは「荒天」と関連させることにはならないのである。そのときには「好天」の「好」について「好意」「好調」「好機」と関連させ、「天」について「晴天」「曇天」「雨天」と関連させるほうが効果的である。

実は、日本語の学習においては、[コウテン]という特別の状態を表す語の学習に当たり、「好天」という漢字を覚えなければならないのである。こうして、[デンシャ]に対して「電車」を、[ギョウニク]に対して「牛肉」を覚えなければならないと考えると、その点での記憶の負担は相当なものである。しかし、[コウテン]を機に「好」と「天」を覚えることは、「好意・

好調・好機…」と用いられる重要な意味の単位「好」を覚えることである。同じようにして「天」も、「晴天・曇天・雨天…」と用いられる「天」を覚えることである。また、こうして覚えることによって初めて、「いい天気」を表す「好天」という語が、語として頭の中に定着するのである。

5. 漢字訓読による活用語

以上で“漢字の音読に由来する部分は漢字で書く”という準則の内容が、一応は明らかになったかと思う。それならば、漢字音読に由来する以外の部分はどうかということになる。これについては、“活用語は語幹の部分を訓読の漢字で書く”という準則を取り上げることができる。³⁾

一般に、その漢字の中国語としての意味に当たる日本語がその漢字の読みとして固定したものを、その漢字の字訓という。「牛」という漢字を[ウシ]と読み、「車」という漢字を[クルマ]と読むのが字訓である。そうして、漢字をそういう字訓で読む場合が訓読であり、活用語は語幹の部分をこういう訓読の漢字によって書くのである。[ギェウニクヲタバマス]についていえば[タバマス]の[タ]が訓読の漢字で書かれ、[デンシャニノリマス]は[ノリマス]の[ノ]が訓読の漢字になる。そうして、これも日本語を文字で書き表すことに習熟すれば、この部分を漢字で書くということが直感できるのである。

それならば、なぜ[タバマス][ノリマス]について、この[タ][ノ]の部分に漢字の訓読を用いることが直感できるかということである。これについては、[タベ][ノリ]という部分の文法的性質によると考えることが可能である。

この場合の文法的性質については、一般に活用という考え方が行われている。それは、この種の語が他の語と続く場合に、次のような変化をすることに基づくものである。

3) ここで活用語という中には、形容詞、形容動詞も含まれることになる。しかし、以下は動詞についてのみに詳述することにする。

たべーない	たべーます	たべーて	たべる	たべるーとき
たべれーば	たべる	たべーよう		
のらーない	のりーます	のっーて	のる	のるーとき
のれーば	のる	のろーう		

そうして、この場合に、送り仮名の付け方は“活用語尾を送る”という通則を設けている。すなわち、「食べーない 食べーます …」 乗らーない 「乗りーます…」となる。[タベマス][ノリマス]について漢字1字の訓読と直感させる根拠は、「たべる」「のる」という語の持つこのような文法的性質によるのである。

ただし、ここで一つだけ注意しておかなければならないことがある。それは[タベマス]を「食べます」、[ノリマス]を「乗ります」と書くとしても、「食」を「た」と読む漢字、「乗」を「の」と読む漢字と考えてはならないということである。そのように考えて五十音順当用漢字音訓表を調べても、「食」「乗」という漢字を探し当てることはできない。その場合に見付かるのは「田」や「野」である。「食」という漢字の字訓は「た」ではなく「たべる」であり、「乗」の字訓は「の」でなく「のる」なのである。そのことは、字訓というのが“その漢字の意味に当たる日本語”だということを考えれば、当然のことである。そうして、五十音順当用漢字音訓表において「たべる」「のる」のところに掲げられているのが、それぞれ「食」「乗」という漢字なのである。

それにもかかわらず、実際に漢字を用いるときには、「食べます」「乗ります」のように書く。その理由は、送り仮名を字訓の一部と考えるからである。すなわち、日本語の場合には動詞の語尾が活用するため、どのような活用形として用いるかをそのつど明らかにしなければならない。そこで、活用語を漢字で書き表す場合に、そのときの活用形を示すため、訓読の終わりの部分を仮名の形で漢字の終わりに書き加えるようになった。その場合の仮名の部分が送り仮名である。そういう経緯から、「食べます」「乗ります」の読み方を振り仮名の形で示すときには、「食」に「た」、「乗」

に「の」という仮名を付けることになる。しかし、それは読み方を示すときの便宜に過ぎないのであり、「た」「の」が「食」「乗」という漢字の字訓というわけではないのである。

また、「食」の字訓が「たべる」、**「乗」**の字訓が「のる」だということは、「食」「乗」という漢字の意味がそれぞれ「たべる」「のる」だということである。そのことを基礎にするから、「食事」が「たべる・こと」、「飲食」が「のんだり・たべたり」になるのである。また、「乗車」が「くるまに・のる」、「乗降」が「のったり・おりたり」なのである。漢字はそれぞれ意味を持っていて、その漢字を音読しても訓読しても、その意味に変わりはないのが原則である。そうして、このような考え方で一貫させるためにも、「食」の字訓は「たべる」、「乗」の字訓は「のる」と覚えることが好都合なのである。⁴⁾

6. 実質的な意味を表す漢字

漢字の用い方に音読の場合と訓読の場合とがあること、すでに述べたとおりである。そうして、その場合の訓読漢字の用い方の一つが活用語になるのである。当用漢字音訓表に掲げられた字訓について見ると、全体の約4分の3は活用語である。この点からも、訓読漢字の用い方について、まず活用語を取り上げるといことは、決して不適當ではないのである。しかし、訓読漢字の中には、活用語以外の語を表すものも決して少なくないのである。

それならば、そういう訓読漢字はどういう場合に用いるかということであるが、これについては、次のように考えることができる。例えば、[ギューウニクヲタバマス]の代わりに[サカナヲタバマス]、[デンシャニノリマス]の代わりに[ウマニノリマス]という場合を考えることにする。この場合

4) 実際には活用語尾だけでなく、その前の音節から送り仮名にするものもある。また、活用語以外について言えば、副詞・接続詞にも送り仮名が付き、名詞の中にも送り仮名を伴うものがある。しかし、これらは漢字遣いというよりもむしろ送り仮名の問題になるので、ここでは触れないことにする。

の〔ギョウニク〕〔デンシヤ〕が音読の漢字で書かれることは前に述べたとおりであるが、これが〔サカナ〕〔ウマ〕となっても、一般には漢字で書かれるのである。そうして、その場合の「魚」「馬」という漢字の使い方が、訓読漢字になるのである。しかし、〔サカナヲ〕の〔ヲ〕や〔ウマニ〕の〔ニ〕が漢字で書かれることはない。また、〔タベマス〕〔ノリマス〕の〔マス〕が漢字で書かれることもない。つまり、助詞や助動詞などを漢字で書くことはないのである。

実は、日本語を文字で書き表すことに習熟すると、この場合の〔ギョウニク〕〔デンシヤ〕〔サカナ〕〔ウマ〕などの部分について、これを漢字で書くということを直感するに至るのである。そうして、その根拠は、これらの語が実質的な意味を表しているということである。この種の実質的な意味を表す部分に対し、〔ヲ〕〔ニ〕〔マス〕などは形式的な要素を表す部分とすることができる。同じ考え方を活用語に適用すると、語幹の部分を実質的な意味を表し、活用語尾が形式的な要素を表すと考えることができる。そうして、〔タベマス〕〔ノリマス〕を「食べます」「乗ります」と書くということは、そのまま実質的な意味を表す部分を漢字で書き、形式的な要素を表す部分を仮名で書くということにつながるのである。⁵⁾

そこで、ここからも“漢字遣い”の準則を導き出すことができるわけである。それは、次のように言い表すことのできる準則である。

○漢字仮名交じり文においては、実質的な意味を表す部分は漢字で書き表し、形式的な要素を表す部分は仮名で書き表す。

漢字仮名交じり文における“漢字遣い”の準則としては、すでに第2節で“漢字の音読に由来する部分は漢字で書く”とし、第5節で“活用語は語幹の部分を訓読の漢字で書く”とした。これに対し、ここにまとめたの

5) 副詞・接続詞において最後の1音節を送る場合は、活用語と異なる理由が考えられる。それは、「再び電車に乗ります」のように、漢字と仮名が交互に並ぶことを意図したものであり、そのために分かち書きをしたと同じ効果が現れるわけである。しかし、ここでは送り仮名の通則を取り上げることが目的ではないから、この点についての詳説は省略する。

は、それ以外をも含めた、より基本的な準則と言えるものである。

ところで、この場合、[ギョウニク][デンシャ]については音読の漢字2字を用いること、すでに述べたとおりである。それに対し、[サカナ][ウマ]については、漢字1字の訓読を用いることが直感できるに至るのである。この場合、漢字の訓読を用いることを直感させる根拠は、これが漢字の音読と異なる音の並びになっているということである。⁶⁾ また、漢字1字を直感させる根拠は、これが一つの意味単位からできているということなのである。

一般に漢字の持つ意味に当たる日本語が字訓となったわけであるが、その場合の字訓としては、基本的な語を当てるが多かったのである。そのために、基本的な語はすべて漢字1字の訓読で書かれることにもなったのである。また、この種の基本的な語が実際に何音節から成るかについては、次の数字が参考になると思う。これは当用漢字音訓表に送り仮名を伴わない形で掲げられた字訓の音節数であるが、それぞれの音節数に該当する字訓の種類は、次のようになっている。

1音節の訓...81	2音節の訓...366	3音節の訓...94
4音節の訓...25	5音節の訓... 3	6音節以上の訓...0

つまり、大部分の字訓は2音節だということである。

したがって、[フユヤマ][カワカミ][ヨコガオ][アシオト]などの語は、いずれも訓読漢字2字によって書くと考えてよいのである。[ナマタマゴ][ムギバタケ][オオムカシ][ヒダリガワ]なども漢字2字で書き表されるの

6) 字訓の場合にも、「あい(相)・ゆう(夕)・いき(息)・いく(幾)・はつ(初)・おん(御)」など、字音の場合と同じ音の並びになるものがある。しかし、これらは該当する種類も少なく、むしろ例外的存在である。それならば、漢字訓読語に見られる音の並び方の特色は何かということになる。これについては、「あか(赤)・みぎ(右)・うす(白)・そこ(底)」など“同列音の連続”の多いことが森卓明「中根式を基礎とした和語縮字法」(昭和4年)に取り上げられている。これに関連し「たから(宝)・しきり(頻)・つくる(作)・こころ(心)」など3音節めにラ行音の付く組み合わせが多いことも指摘されている。また、ラ行で始まる組み合わせやエ列音相互の組み合わせがほとんどないことも指摘されている。これらも、漢字の字訓に見られる特色である。

である。しかし、このことから、[ミギテ][ノハラ]が漢字2字、[ミドリ][ココロ]が漢字1字という根拠は、導き出せないのである。

実は、この場合、[ミドリ][ココロ]を漢字1字で書き表すのは、この語がそれぞれ一つの意味単位で構成されているということである。[ミギテ][ノハラ]を漢字2字で書き表すのは、この語が[ミギ・テ][ノ・ハラ]という二つの意味単位で構成されているということである。そうして、[フユ・ヤマ][カワ・カミ][ナマ・タマゴ][オオ・ムカシ]が漢字2字で書かれるということも、これが二つの意味単位で構成されているからにほかならないのである。

7. 語の意味と漢字

これを要するに、漢字というのは、音読の場合も訓読の場合も、実質的な意味の語を構成する単位となっているのである。そうして、日本語における漢字使用の実情が以上のようなようであるとすれば、そこから日本語の語彙の習得法もおのずから導き出せるのである。それは漢字の果たす役割が非常に大きいということであり、漢字を除外して語彙を増やすことなど全く不可能だと言ってもよいのである。

そこで、例えば「車」という漢字であるが、[クルマ]という新出語の学習に当たって「車」という漢字を習得しなければならない、となると、学習者にとって非常な負担である。[クルマ]の場合には「くるま」という仮名書きも行われているのであり、学習者の立場からはこのほうが容易なこと言うまでもない。何のために苦勞してわざわざ「車」という漢字を覚えなければならないかという疑問も起こるに違いない。日本語は勉強したいけれども漢字はなるべく少なくしてくれ、などという要求が出るのもこのためである。

しかし、「車」という漢字は、単独で[クルマ]という語を書き表すために役立つだけではないのである。それは[クルマヨセ][クルマガエシ][クルマド]などの[クルマ]を書き表すためにも役立つ、[ニグルマ][ウシグル

マ][カザグルマ]などの[グルマ]のためにも役立つ。それとともに「車寄せ」「車返し」「車戸」、あるいは「荷車」「牛車」「風車」と書くことによって、[クルマ]も[グルマ]も一つの意味単位であり、しかもこの二つが同じ意味単位だということも分かるのである。

それだけではないのである。「車」という漢字は、[シャ]と読んで[デンシャ][ジドウシャ]を書き表すためにも役立ち、[シャドウ][シャコ]のためにも役立つ。そうして、この場合に「電車」「自動車」「車道」「車庫」と書くことによって、この[シャ]が「くるま」という意味単位を表すことが明らかになる。それとともに、この[シャ]の意味が、[ホンシャ][ガクシャ][キシユクシャ]の[シャ]と異なることも明らかになる。後者は「本社」「学者」「寄宿舎」と書き、「～車」とは書かないからである。⁷⁾

ただし、ここで三つだけ注意しておかなければならないことがある。その一つは、字訓が同じであっても漢字が異なれば、その意味が異なるということである。例えば、「乗」の「のる」であるが、五十音順当用漢字音訓表を見ると、「のる」という字訓を持つ漢字には他に「載」がある。その場合、「乗」は「人が車などの上に移る」意味で用い、「載」は「物が車などの上に積まれたり、物の上に物が置かれる」意味で用いる。この二つの「のる」は、「物のすぐ上に位置する」という点で共通の意味を持つてはいるが、「乗」「載」それぞれの持つ意味には細かい違いがある。そうして、その意味の違いは、「乗車」「同乗」や「積載」「記載」という漢字音読語の場合にも見られるのである。

次に注意しなければならないことは、一つの漢字の持つ意味が一つとは

7) 現代表記においては、漢字の使用に制限があるため、[ウマニノリマス]が[ソリニノリマス]となると、[ソリ]は「そり」と仮名書きになる。しかし、本来の書き方に従えば、「轡」という漢字書きが行われていたのである。また、[バスニノリマス]となると[バス]は片仮名で「バス」となる。これも、かつては「乗合」と書いて「バス」と読ませていたことがある。そうして、これらを漢字で書こうとしたのは、すべて「実質的な意味を表す部分」だからである。そういう点を考えると、どの部分を漢字で書き、どの部分を仮名で書くかについての準則は、現代表記のほうがかえって複雑になったと言えるのである。

限らないことである。例えば、「校」という漢字であるが、これは「校舎」「高校」など、「がっこう」という意味で用いる場合が非常に多い。しかし、「校」には「校正」「校閲」など「くらべる(見合わせて違いを見る)」意味もある。その場合にまで「校」を「がっこう」の意味に理解し、「学校で直す」「学校で調べる」と考えてはならないのである。そうして、このことは、教える場合にも注意しなければならないことである。一般に教科書では読み替え漢字を新出漢字に準じて扱うことが多いが、“意味替え”の場合は無視されている。しかし、漢字が意味の単位を表している点から考えれば、意味替えのほうが重要だということを見逃してはならないのである。

最後に注意しておかなければならないことは、漢字の字訓がその漢字の意味を表しているとしても、漢字には字訓となっていない意味も含まれているということである。このことは上記の「校」の場合にも言えることであるが、「校」に「まなびや」や「くらべる」という字訓は与えられていない。これは本来はそういう字訓を持っていたのであるが、当用漢字音訓表ではこの種の古い字訓や一般に用いない字訓が除外されている。しかし、字訓が掲げられていないからといって、その漢字の持つ意味まで切り捨ててしまったわけではないのである。「校舎」「高校」の場合には「がっこう」という意味で用いられ、「校正」「校閲」の場合には「くらべる」意味で用いられていることを理解しなければならないのである。

8. 結 語

日本語教育の場合にも、国語教育の場合と同じく、平仮名と片仮名が初歩の段階で学習されている。そうして、漢字については、学習が進むに従って少しずつ増やしていくという方針が取られている。[デンシャ]という語についていえば、まず「でんしゃ」と書かれ、後に「電車」となるのが一般である。そのために学習者は、とかく平仮名と片仮名を基本的なものと考え、漢字については二次的なものと考えがちである。

しかしながら、漢字が日本語を構成する実質的な部分につき“意味を構

成する単位”として用いられていること、以上に述べてきたとおりである。漢字は音読しても訓読してもその意味は同じであり、前後の関係から別の音に変化してもその意味に変わりはない。そうして、漢字の意味を単位として組み立てた漢字音読語は、その漢字を除外しては存在しえないくらい、その漢字と密接に結び付いている。この種の語については、漢字を除外してその意味を理解することは困難であり、漢字と切り離して記憶することなど全く不可能なのである。

そうして、漢字が日本語の中の実質的な意味を表す部分に大きな役割を果たしているということは、そのまま“漢字遣い”の基本につながるのである。すなわち、漢字を用いる場合には“その漢字の持つ意味を考慮せよ”ということである。平仮名のほうは、“大体、現代語音に基づいて音節を単位として用いる”こと、内閣告示「現代かなづかい」の示すとおりである。これに対し“漢字遣い”のほうは、“大体、意味に基づいて意味を構成する単位として用いる”のである。したがって、そのような漢字を仮名と同じような“文字”と考えることは、実情に合っていないのである。“漢字遣い”は“仮名遣い”と全く異なる準則だということを、十分に理解して掛からなければいけないのである。

この小論が、そういう立場で漢字教育を考える場合に、一つの指針となることを期待するものである。